資料３

政府出展基本計画（素案）
概要

2023年３月
農林水産省・国土交通省

基本計画について

- 本基本計画は、２０２７年国際園芸博覧会において開催国政府として出展するにあたり、その意義や理念、施設・空間計画や展示計画等の基本的事項についてとりまとめたものであり、今後、具体的に進められる設計等において、基本的な方針となるものである。

Ⅰ　はじめに

- 本計画の位置付け、２０２７年国際園芸博覧会の背景・目的及び概要

Ⅱ　政府出展の意義・理念・テーマ

Ⅲ　施設・空間計画

- 政府出展区域の特性、施設・空間構成の基本的方針

Ⅳ　展示計画

- 展示フロー、展示手法、展示のターゲット、展示の構成、展示としての建築物

Ⅴ　管理運営計画

- 展示用植物の供給管理、展示施設・栽培管理施設、季節に応じた管理運営、順応的な管理、将来への人材育成、インクルーシブ、多言語対応、環境配慮への対応、来場者の安全の確保、警備・警護

Ⅵ　行催事計画

Ⅶ　広報・参加計画

- 会期前からの機運醸成、子供や教育機関との共創、多様な主体の参加による共創、デジタルを活用したコミュニケーション、会期後のコミュニケーション

Ⅷ　今後の検討課題と進め方

- 令和５年度以降の推進スケジュール

政府出展の意義

２０２７年国際園芸博覧会の背景と目的

国際社会で共通の地球環境の持続に関する課題
- **生物多様性の損失**（=Natureに関する課題）
- **地球温暖化等に伴う気候変動**（=Carbonに関する課題）

※グローバルリスク報告書2023年版（世界経済フォーラム）では、これらが長期的なリスクの上位を占める。

今後の社会経済活動の「鍵」＝自然資本の保全と持続的な利用
- **SDGs**を支える土台となる自然環境と密接不可分な分野（水・衛生、気候変動、海洋資源、陸上資源）
- **GX**（グリーントランスフォーメーション）の取組の鍵

２０２７年国際園芸博覧会

自然資本、とりわけ植物に焦点を当て、人や社会と自然との関わりを見直し、多様な最適解を構築する機会へ
- 植物は人間の暮らしに身近な自然資本（食料、資源、文化の基盤等）
- 生物生息域の提供や、二酸化炭素の固定等を通じ環境問題と密接に関連

政府出展の意義

博覧会の**テーマを先導**し、国の**政策への理解**とその**社会実装を促進**するとともに、これらを我が国の**ノウハウとして発信し国際社会へ貢献**

１)政府出展により推進する政策

グリーンインフラ
自然環境が有する多様な機能の活用

×

みどりの食料システム
生産力の向上と持続性の両立を実現する食料システムの確立

自然資本の保全と持続的な活用を通じ、以下の取組・課題にも貢献
- **SDGsの達成**
- **自然を活用した解決策**（NbS：Nature based Solutions）
- **自然・生物多様性の回復**（Nature Positive）
- **人口減少や少子高齢化が進行する社会における暮らしのあり方や経済発展の方策の提案　等**

これら政策の実現によりもたらされる**社会・暮らしの将来像の提示**を通じ、**自然との関わりを見直し強化する取組を先導**

２)政府出展の意義を果たすための視点

都市と農村、生活と生産の分離等を背景に、自然環境が有する多様な機能への認識が希薄化
→ **人が生命の潮流と循環の中で生きていることを改めて認識する必要**

視点①：日本の自然観の見つめ直し
- 植物との共生み（ともうみ）による暮らし・文化の実践
- 植物との関わりを通じて育まれてきた価値観等や人材等の喪失危機

視点②：最先端の知見・技術の活用
- Society5.0等、新たな知識や技術がもたらす**社会変革**
- 科学技術の発展に伴い明らかになりつつある**花や緑の効用**

自然と共に生きることで営まれてきた**日本の暮らし**、育んできた**日本の風景**、暮らしを支えてきた**伝統的な技術**を見つめ直すとともに、今日得られている最先端の知見・技術を加え、**未来へつながる方法論へと再構築し、具現化**

政府出展の理念

生物多様性の損失、気候変動に伴う災害の激甚化・頻発化及び食料生産への深刻な影響等、国際社会で共通の地球環境の持続に関する課題が顕在化している。
こうした現実を直視し、以下を理念として政府出展を実施する。

① 暮らしとともにある日本の自然観の見つめ直し

日本の自然に係る思想、文化、美意識を振り返り、植物をはじめとする自然と共生してきた自然観を見つめ直す場とする。さらに、植物が果たす多様な機能を活用してきた日本の知恵や技術の巧みさを再認識する場とする。

② 花や緑、農、大地を礎とする日本の将来像の提示

日本に古来受け継がれてきた知恵や新たな知識・技術を結集し、花や緑、農、大地が果たす多様な機能を基盤とする持続可能で幸福感が深まる社会や暮らしを、国際的に共有可能な日本の将来像として提示する。それにより、人々が気づきを得て、その後の探求や実践を促す場とする。

■ 政府出展のテーマ

- 政府出展の**意義・理念**を踏まえ、『物理的・空間的機能や効果だけでなく、良好な景観や地域の歴史・風土、生活文化の形成や自然観、郷土愛の醸成等、国民の精神性や満ち足りた幸福感、心身の健康の向上など**多くの価値観を包含する包括的な概念をより強く込めた言葉**』である**「みどり（※）」をキーワード**として使用したテーマ例や、政府出展懇談会で提案のあったキーワードを以下に示す。
- **最終的なテーマ**は、**具体的な展示概要が定まった段階**で、**当該内容を端的に表現する視点**も踏まえて**改めて検討・決定**する。

(※)「新しい時代における「みどり」の整備・保全・管理のあり方と総合的な施策の展開について（国土交通省）」より）

【テーマ例】

（案１）みどりがつむぐ明日の暮らし

・Weaving the Future Life from “MIDORI (Green)”

（案２）みどりがつむぐ持続可能な未来

・Weaving the Sustainable Future from “MIDORI (Green)”

（案３）みどりとつくる持続可能な社会

・Creating/ Sketching Green society for sustainable future and well-being

【キーワード例】

移り変わる四季や儚い自然観が伝わるもの／その時代が想像できるもの／耕す・創造する（cultivate・creating）／成熟した豊かな暮らし／めぐる／醸す／つながり／活力／活性化／生命力／集約　など

■ 施設・空間計画（出展区域の特性と出展にあたっての基本的方針）

■出展区域の特性

■地形的要素

（１）和泉川の流頭（源頭部）
（２）比較的起伏のある微地形
　　（アンジュレーション）
（３）既存木の保全活用

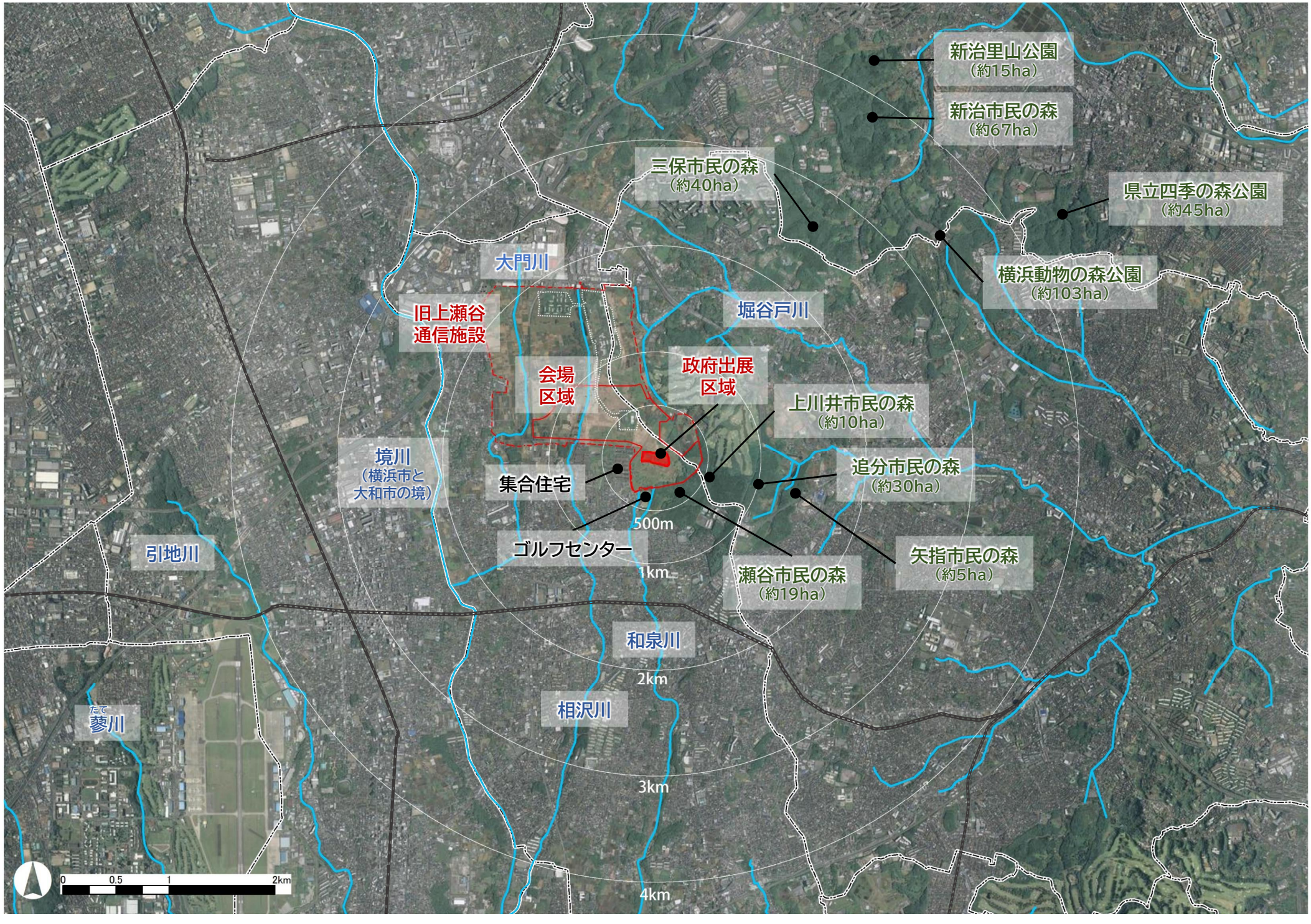
■広域的な眺望

（１）東方向(市民の森)への眺望
（２）西方向（集合住宅）への眺望
（３）南方向（ゴルフネット）への眺望

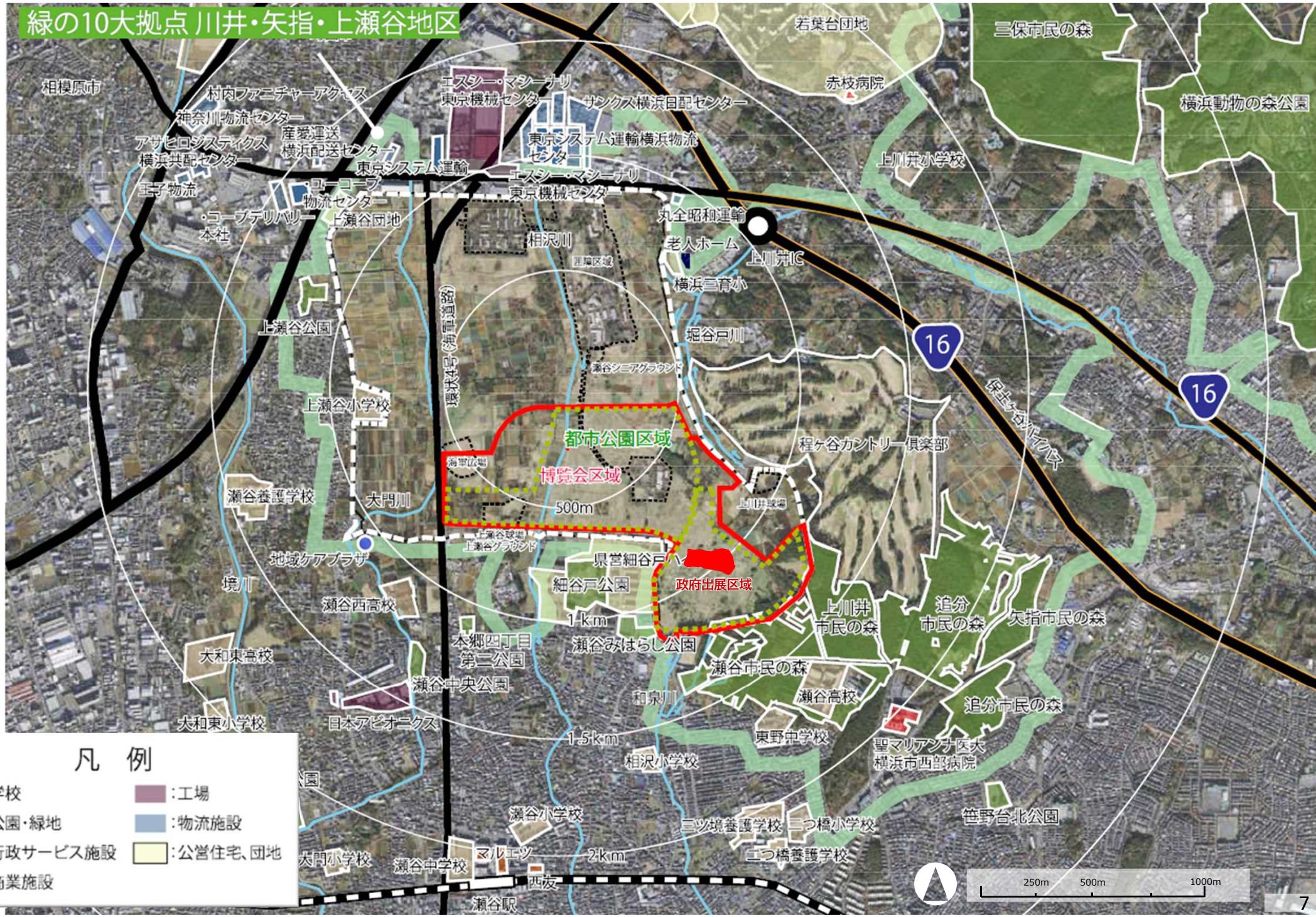
■博覧会の会場計画、博覧会後の都市公園の計画

（１）会場における通景軸
（２）博覧会の会場計画で想定されている動線
（３）博覧会後の都市公園の計画（庭園、体験農園）

施設・空間計画（出展区域の特性：広域的な位置）

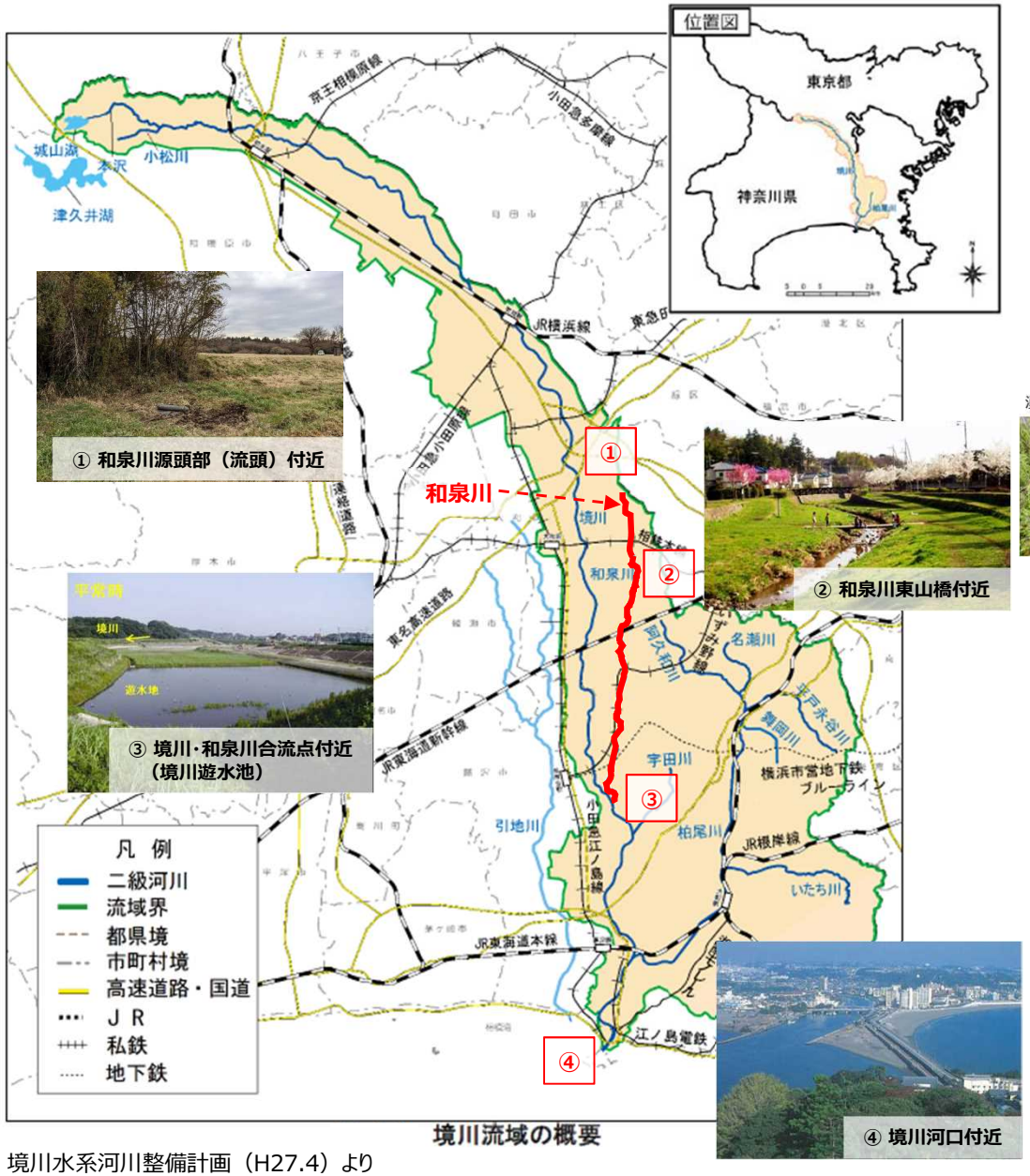


施設・空間計画（出展区域の特性：周辺の緑地との位置関係）



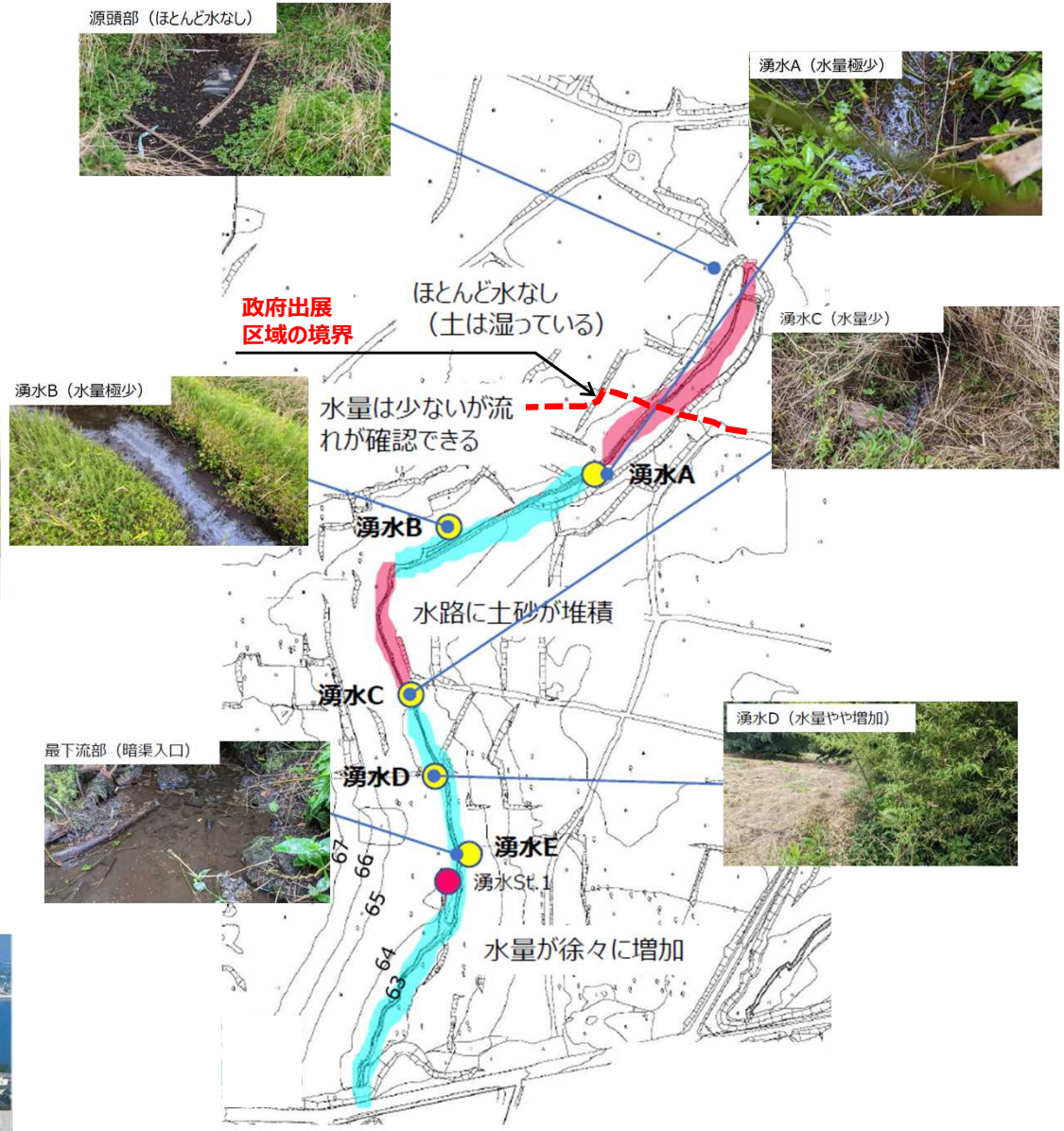
■ 施設・空間計画（出展区域の特性：地形的要素（和泉川））

- ➢東京都、神奈川県の６市にまたがる**二級河川 境川の支川**。幹川流路延長約52km、流域面積約211㎢。（和泉川単独では延長9.5km）
- ➢**流域人口は、平成22年に約158万人**であり、H27年時点では更に増加傾向。
- ➢**和泉川の流頭付近では、下流にゆくにつれ、徐々に流量が増加**し、**水のしみ出しや湧水箇所は複数あ**ると考えられるが、明確な湧出口は不明。
- ➢水質に関する詳細な調査は実施されていないため、**飲み水とできるかは現時点では不明。**



境川流域の概要

境川水系河川整備計画（H27.4）より



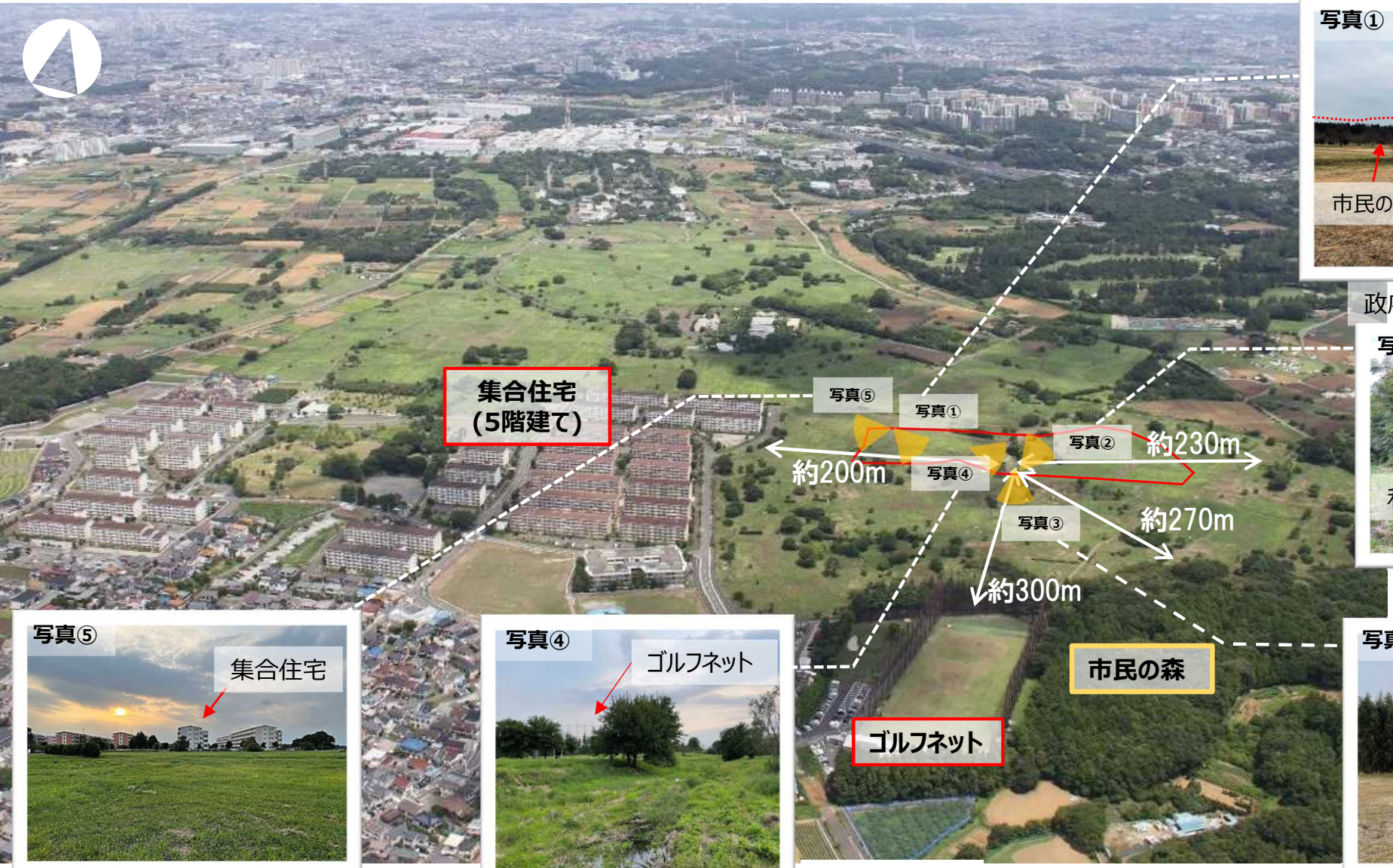
横浜市より（※2022年7月調査時点）

施設・空間計画（出展区域の特性：地形的要素）

- 会場区域の中でも**比較的起伏のある微地形（アンジュレーション）が形成。**
- **中央部は和泉川の流頭が位置する窪地**であり、和泉川以西は東方向に下り勾配、和泉川以東は本区域の境界部まで緩やかな上り勾配となる。
- また、**草地が広がり樹木が点在**し、北側縁辺部及び**和泉川流頭には竹林が位置。**

施設・空間計画（出展区域の特性：景観特性）

- **東・南方向**に約200～300m離れた距離には**自然豊かな「瀬谷市民の森」**が広がる。
- 中央に和泉川が位置する凹型地形であり、**和泉川以西から東方向を望む際は**、視点から一度下降し再び立ち上がって市民の森へと続く**地形のダイナミズムを連続的に捉えることが可能。**
- **西方向には集合住宅**、**南方向にはゴルフネットの一部**が樹林の背後に確認できる。



政府出展区域西端から撮影

流頭から撮影

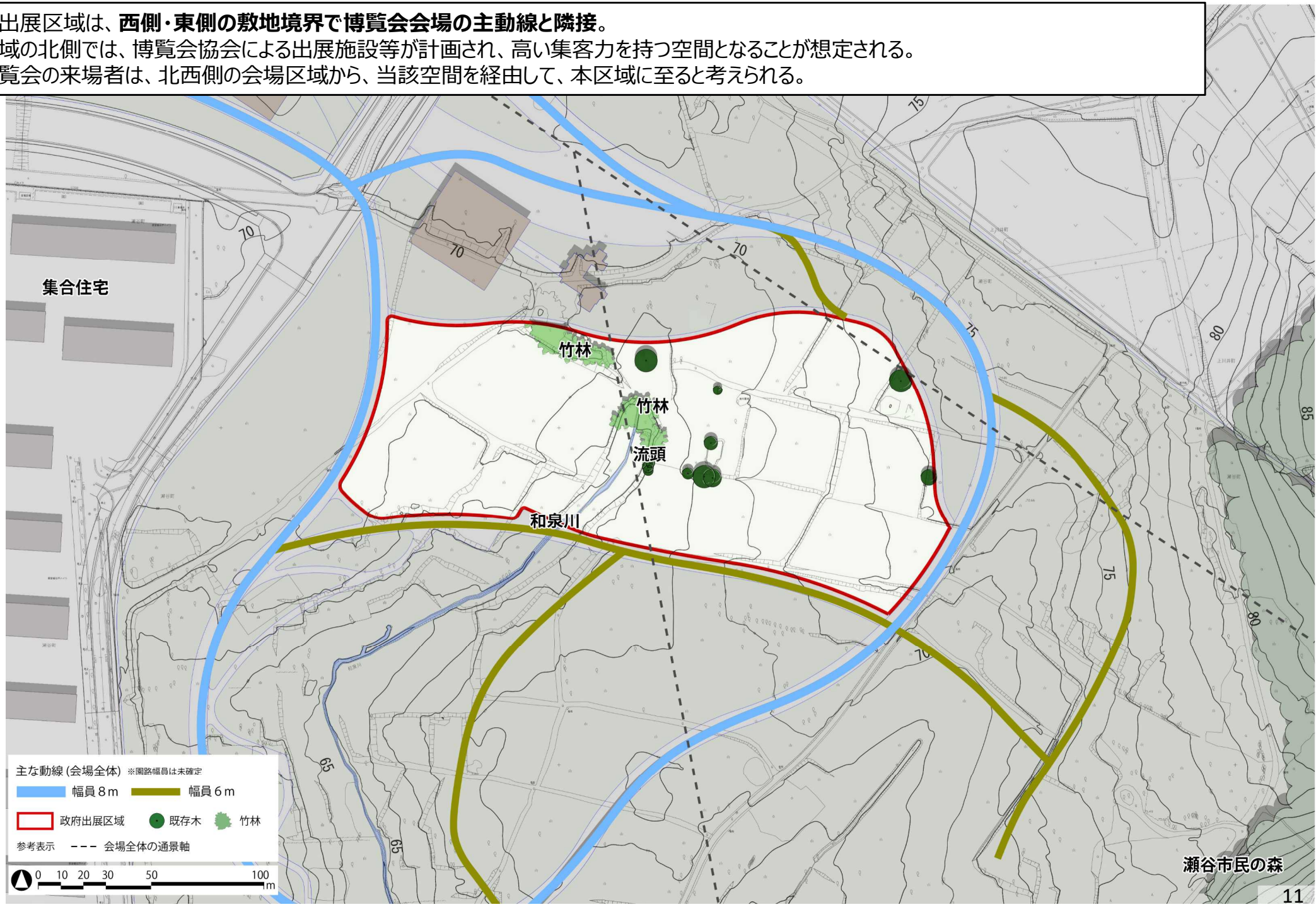
政府出展区域西端から撮影

流頭から撮影

流頭西側から撮影

施設・空間計画（出展区域の特性：博覧会の会場計画で想定されている動線等）

- 政府出展区域は、**西側・東側の敷地境界で博覧会会場の主動線と隣接。**
- 本区域の北側では、博覧会協会による出展施設等が計画され、高い集客力を持つ空間となることが想定される。
- 本博覧会の来場者は、北西側の会場区域から、当該空間を経由して、本区域に至ると考えられる。



施設・空間計画（出展区域の特性：博覧会後の都市公園の計画）

- 政府出展区域は、博覧会終了後、横浜市の都市公園の一部として引き継がれる計画。
- 当該公園の基本計画(案)では、本区域は日本庭園や体験農園として利用される想定。
- 本出展の検討に当たっては、将来計画されている公園での活用を見据えつつ検討を進める視点も必要。

資料：（仮称）旧上瀬谷通信施設公園　基本計画（案）　横浜市　作成（令和４年６月）

施設・空間計画（出展に当たっての基本的方針）

建築物の規模・機能

- 出展に係る建築物は、過去の博覧会の実績等を踏まえ、**建築面積の上限を5,000㎡程度とする。**
  （展示部門:最大3,000㎡程度、管理部門:最大2,000㎡程度）

施設・空間構成

- **比較的起伏のある微地形（アンジュレーション）や和泉川の流頭など、現状の特性をいかした空間**とする。
- 建築物は、地形の改変を可能な限り避け、**微地形との調和を図る観点**、**市民の森や屋外展示空間への多様な眺望を創出する観点**から、本区域内の南側に配置し、**和泉川を挟んで東西に分棟**とする。
- **東西の建築物は渡りによって接続**し、和泉川の流頭を保全するとともに**東西の空間をつなぐ役割**を果たす。
- **庭屋一如の考え**のもと、**半屋外や半屋内の空間を創出・活用**し、屋内外を連続的に接続するとともに、**北側・南側の隣接する敷地との一体的な景観形成**を図る。
- **植物一つ一つを主役と捉える**ことを前提としつつ、**リアルとデジタルが融合した空間構成**を検討。

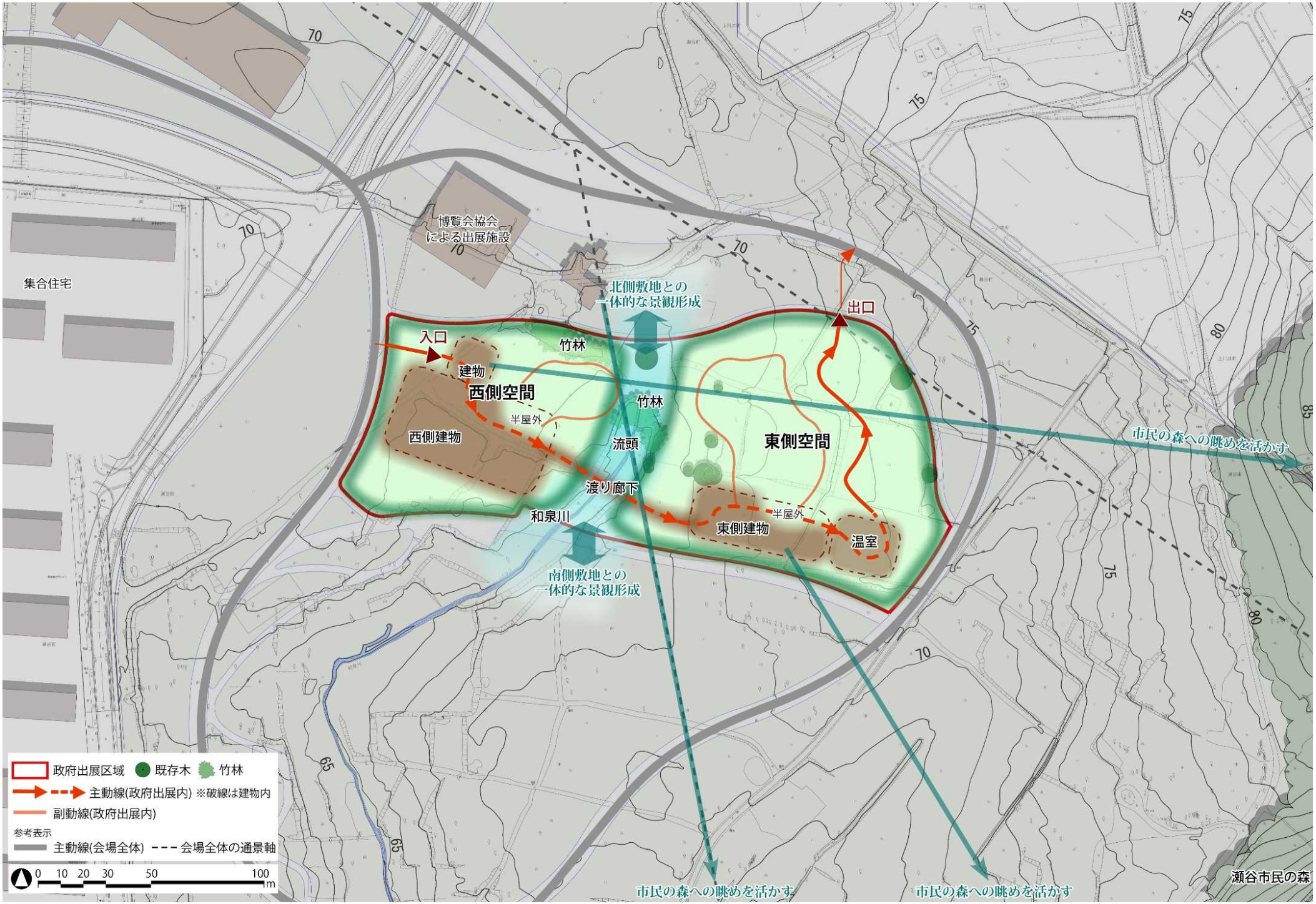
動　線

- 繁忙期における来場者の安全確保の観点や、ストーリー性や全体としてのまとまりを持った展示とする観点から、**基本となる動線を設定。**
- **基本となる動線は、西から東に向けて設定。**また、屋外空間を回遊する**副動線・細園路の設定も検討。**動線を三段階とすることで、繁忙期以外においては、**来場者が自身の関心に応じ自由に散策し、学びを深めることを可能とする。**
- **出展区域の入口は出展区域北西に設定**し、「博覧会協会による出展施設」から来場者が入場することを前提とする。
- **出展区域の出口は出展区域北東に設定**し、繁忙期においても、主動線からより多くの展示体験を見込めるようにする。

全般的な配慮事項

- 本区域内の**既存の樹木や竹林は保全活用**する。
- 集合住宅やゴルフネットによる人工的な景観への眺望については、**来場者の視線を誘導する工夫を取り入れることを大前提**とし、これを補完するものとして、施設や植栽による遮蔽等で対応する。

施設・空間計画（出展に当たっての基本的方針）



展示計画（明日の社会と暮らし(みどりと関わる３つの環)）

～みどりとの共生を新たな形で構築する～

- 持続的な循環
- 自然への適度な働きかけ
- 自然と共に生き、心身ともに心地よく暮らす知恵・美意識 等

人の働きかけ

人

生活の中での みどりとの関わり
【 暮らし・オフィス 】

花や緑あふれる生活習慣
身近な食料生産

- 身近な花や緑の管理
- 花や緑を飾る　等

- バイオフィリア
- ビタミンF・癒し
- 環境浄化
- 生命との関わり　等

都市の中での みどりとの関わり
【 街 】

みどりと共生する都市

コミュニティファーム・花壇づくり等
みどりと農を感じるまちづくり

緑化運動、コミュニティへの参加

- 都市や道路・街路の緑化
- 市民農園などによる都市の農
- 花壇などの整備　等

- 快適な空間
- ヒートアイランドの抑制
- 食べ物を作る喜び
- コミュニティの活性化、社会への貢献　等

農や 自然との関わり
【 農村・山林 】

環境保全・環境負荷の少ない農業

人の交流による地域の活性化

- エシカル消費で産地を応援
- 援農、グリーンツーリズム
- 木材の活用
- 海を守る植樹
- ゴミなどの肥料化
- 道の駅などでの生産消費　等

- 豊かな自然と生物多様性の保全
- 地球温暖化の抑制
- 洪水、土砂災害などの災害抑止
- 持続的な食料供給　等

自然からの恩恵

展示計画（出展全体の展示フロー）

➢政府出展の理念及び施設・空間計画を踏まえ、大きく西側空間と東側空間で展示を構成。
①**西側空間**では、**植物が果たす多様な機能や植物との共生で培われた知恵・技術**に触れ、**日本の自然観を見つめ直す**ことで、明日の社会と暮らしに向けたヒントを得る展示を検討。また、明日の社会と暮らしを考える上での、**現代の諸課題**を自身の生活に重ねるような展示を検討。
②**東側空間**では、古来受け継がれてきた知恵や、新たな知識・技術を踏まえ、**明日の社会と暮らしを提案。**
➢ **デジタル活用による現実では体感できないスケール感**も含め、屋内外において、**全体としてまとまりを持ち**、かつ**五感を刺激する展示**を行い、暮らしの中のみどりの重要性に気づき、日本の将来像の理解と、個々の身近な暮らしにおける行動変容を促す。
➢ **こどもから20代の若年層を重要なターゲット**として捉え、展示を検討する。

入口	日本古来の文化・知恵	現代の課題提起	課題解決・これからの未来	出口

日本の自然観

◆ 植物の仕組みや力、バイオフィリアを感じつつ、日本の伝統文化・技術や、自然と共にある暮らし・文化などから、植物と共生する知恵への気づきを得る。

日本と世界を取り巻く課題

◆ 気候変動や生物多様性の損失、食料供給の持続性などの現在直面する課題を自身の暮らしに重ねる。

明日の社会と暮らし～みどりとの共生を新たな形で構築する～

◆ 生物多様性の保全・持続的な利用、防災など、持続性の確保のために、自然環境が有する多様な機能を活用したグリーンインフラが重要であることを体感する。

◆ ウェルビーイングに向け、社会や暮らしにみどりを取り入れる重要性を、花・緑を取り入れた室内空間(バイオフィリックデザイン)や特殊緑化空間を体感する。

◆ 自然の力の活用と、スマート農業が融合した未来の農の可能性を知る。

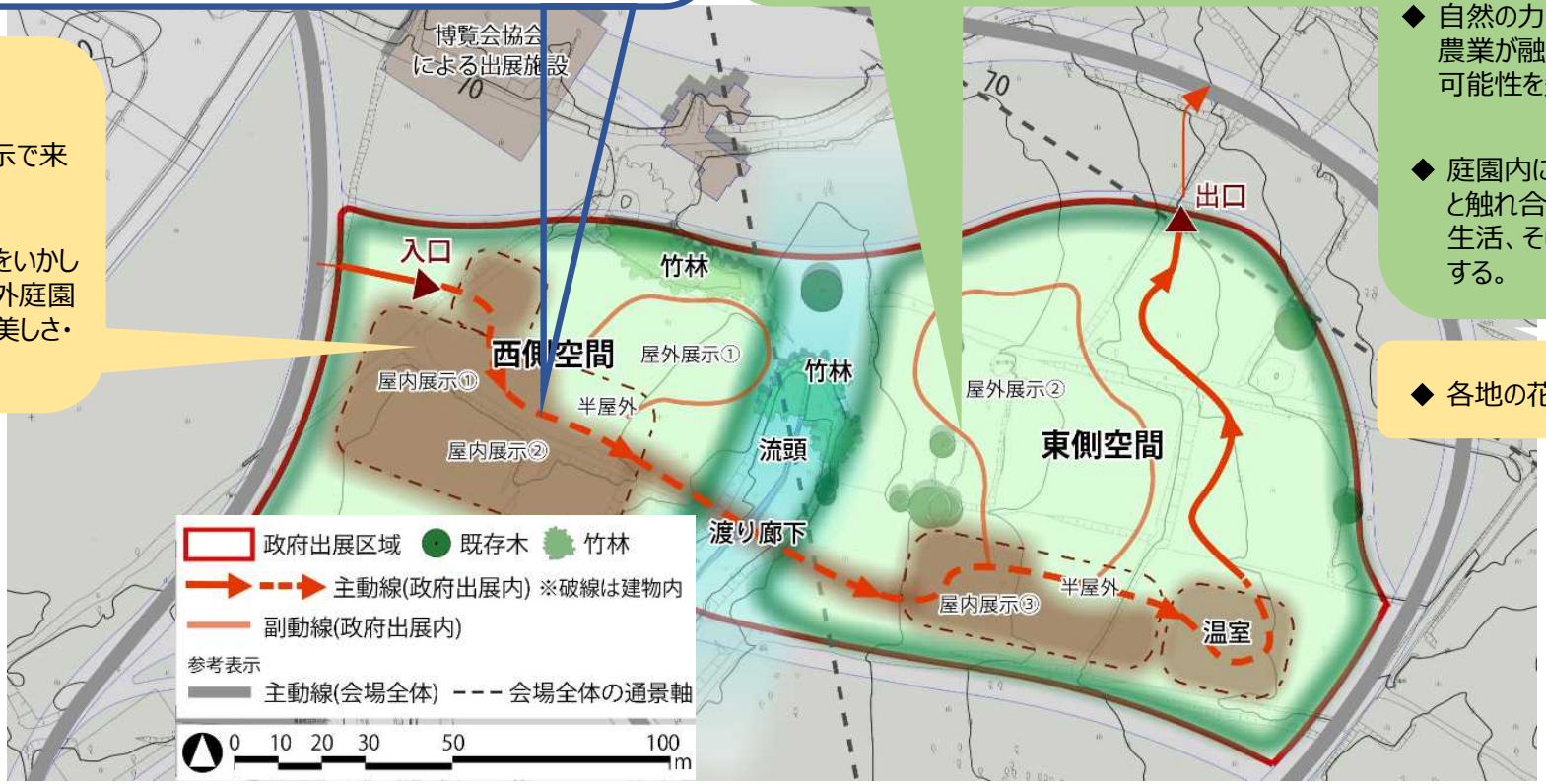
◆ 庭園内に菜園を設置し、農と触れ合うとともに、生産から生活、そして生存を問う場とする。

◆ 各地の花でお見送りする。

入口

◆ 生花を活用した展示で来場者を歓迎する。

◆ 市民の森への眺めをいかした庭園を一望。屋外庭園への期待、みどりの美しさ・雄大さを体感する。



展示計画（屋内：展示フロー）

入口

生花を活用した
展示で来場者を歓迎する

たくさんの花

各産地の花壇、
様々な品種の
花き

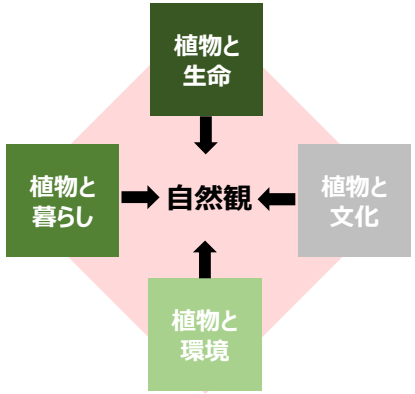
出口

各地の花で
お見送りする

日本古来の文化・知恵

日本の自然観

４つのアプローチで自然との共生を実践していた日本の自然観を見つめ直す



【植物と生命】
植物の仕組みや力
（植物の巨大模型 等）

【植物と暮らし】
自然とともにある暮らし
（里山における循環機能 等）

【植物と環境】
物質循環と
多面的機能
（二次的自然の機能 等）

【植物と文化】
花き園芸・造園文化
（いけばなや盆栽 等）

現代の課題提起

日本と世界を取り巻く課題

現代の日本と世界が直面する課題を考える

- 生物多様性の損失
- 気候変動
- 食料生産の実態

気候変動による影響
（農業による環境への影響 等）

世界の食料生産、
農業情勢
（日本の食料事情 等）

生物多様性の損失に
よる影響
（水田の役割 等）

課題解決・これからの未来

明日の社会と暮らし

持続可能で豊かな未来の暮らしと農業を体感する

- 花と緑とともにある暮らし
- 農と緑のある都市
- 環境にスマートな農業

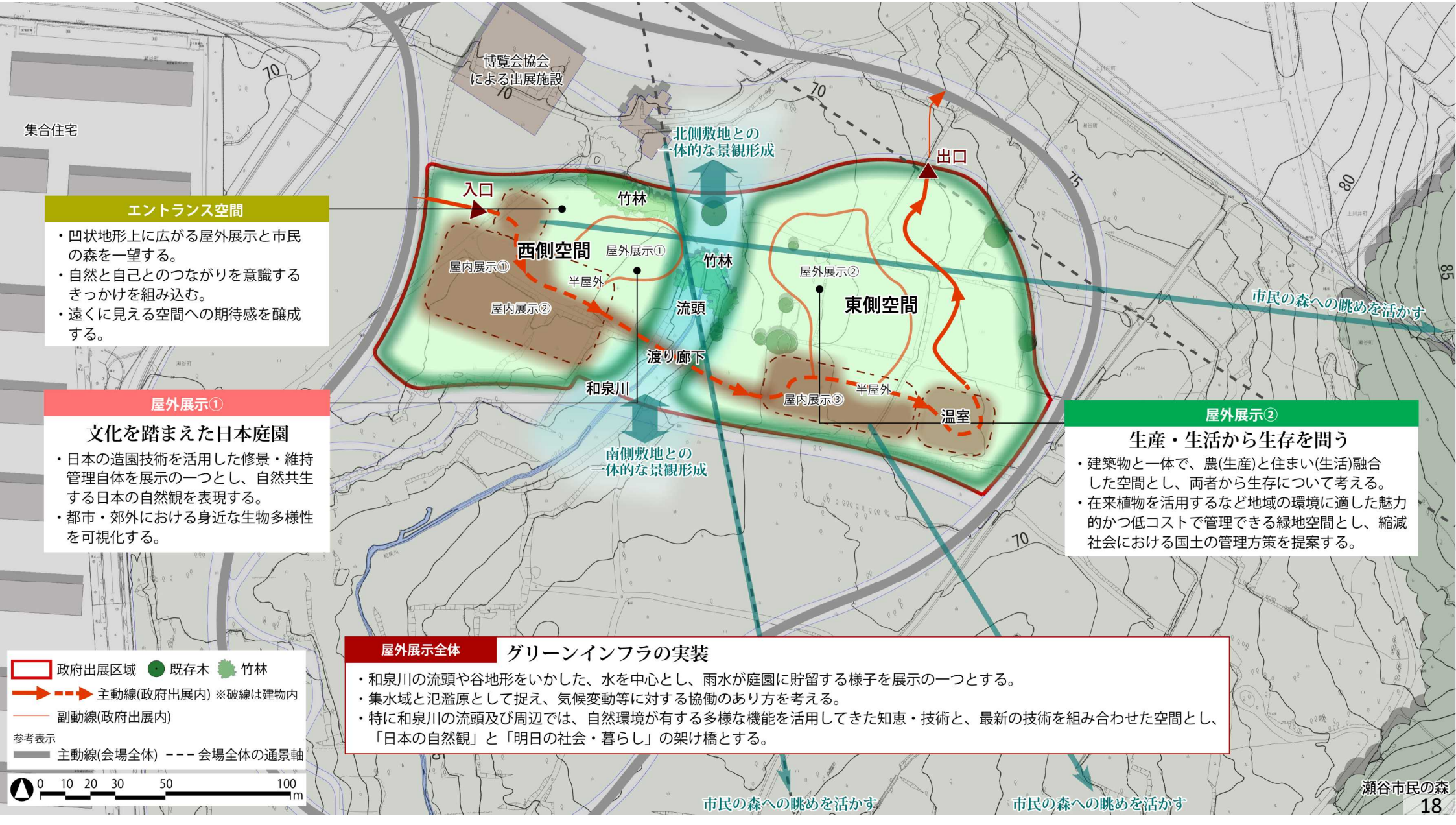
花と緑とともにある
暮らし
（みどりの効用の見える化、
屋内緑化 等）

農と緑のある都市
（市民農園などの都市における農 等）

環境にスマートな農業
（スマート農業、有機農業 等）

展示計画（屋外：展示フロー）

- 入口、屋外展示①、屋外展示②の展示フローを構成するとともに、屋外全体でグリーンインフラを実装し、**五感を刺激する体験を提供。**
- 屋外展示①については、**伝統的な造園技術**や**外国人来場者の関心も高い庭園様式**を駆使した空間とする。
- 屋外展示②については、**生活と農が融合した土地利用**や**持続的な国土管理のあり方**を示す空間とする。



エントランス空間

- 凹状地形上に広がる屋外展示と市民の森を一望する。
- 自然と自己とのつながりを意識するきっかけを組み込む。
- 遠くに見える空間への期待感を醸成する。

屋外展示①

文化を踏まえた日本庭園

- 日本の造園技術を活用した修景・維持管理自体を展示の一つとし、自然共生する日本の自然観を表現する。
- 都市・郊外における身近な生物多様性を可視化する。

屋外展示②

生産・生活から生存を問う

- 建築物と一体で、農(生産)と住まい(生活)融合した空間とし、両者から生存について考える。
- 在来植物を活用するなど地域の環境に適した魅力的かつ低コストで管理できる緑地空間とし、縮減社会における国土の管理方策を提案する。

屋外展示全体　**グリーンインフラの実装**

- 和泉川の流頭や谷地形をいかした、水を中心とし、雨水が庭園に貯留する様子を展示の一つとする。
- 集水域と氾濫原として捉え、気候変動等に対する協働のあり方を考える。
- 特に和泉川の流頭及び周辺では、自然環境が有する多様な機能を活用してきた知恵・技術と、最新の技術を組み合わせた空間とし、「日本の自然観」と「明日の社会・暮らし」の架け橋とする。

展示計画（出展全体の展示フロー）

入口
- 花による歓迎
- 借景の眺め

生花を活用した展示で来場者を歓迎する　　屋外展示と市民の森を一望できる眺め

出口
- 各地の花でお見送り

	日本古来の文化・知恵	現代の課題提起	課題解決・これからの未来
屋内	**日本の自然観**	**日本と世界を取り巻く課題**	**明日の社会と暮らし** **～みどりとの共生を新たな形で構築する～**
	(植物と生命) 自然の仕組み・力	(生物多様性の損失) 生物多様性の損失による影響	(花と緑とともにある暮らし) 暮らしの中にいかす花・緑 ビタミンF
	(植物と環境) 物質循環と多面的機能	(気候変動) 気候変動による影響	(農と緑のある都市) 生産と生活の融合（コミュニティガーデン・エディブルガーデン）
	(植物と暮らし) 自然とともにある暮らし	(食料生産の実態) 世界の食料生産、農業情勢	(環境にスマートな農業) 環境にやさしくスマートな農
	(植物と文化) 花き園芸・造園文化		
	半屋外・半屋内の空間（縁側・軒・ひさし・テラス・坪庭）で有機的につなぐ		
屋外	(文化を踏まえた庭園) ・日本庭園を通じた日本の自然観（和歌・俳句・花札、伝統的造園技術、枯山水）	(生物多様性の損失) 都市・郊外の身近な生物多様性	(流域治水) 集水域と氾濫原での協働、強靭な国土 (持続的な国土管理) 魅力的かつ低コストで豊かな環境 自然を再生する農業
	屋外展示①		屋外展示②（屋上庭園含む）
	グリーンインフラの実装		

自然との共生を実践していた日本の暮らしを見つめ直す

現在の日本と世界が直面する課題を考える

現状の課題解決策と持続可能な暮らしのあり方を体感する

展示計画（建築物について）

- **木造・仮設を基本**とし、半屋外・半屋内の空間を創出し、屋内が連続的で一体となった空間を構成。
- **西側**では、日本の自然観を見つめ直すため、屋敷林や縁側、坪庭など**自然を屋内にも取り入れてきた日本家屋の伝統を体感**できるものとする。
- **東側**では、明日の社会と暮らしを提示するため、**特殊緑化等で自然との一体性を示す**とともに、**省エネ基準を満たす建築**を目指す。
- **資源循環型の建築**(博覧会閉会後のリユース等)や、**水の循環を意識した建築**(屋根の雨水利用等)とするとともに、太陽光発電等による**自然再生エネルギーの活用**を行う。

地形に沿った建築

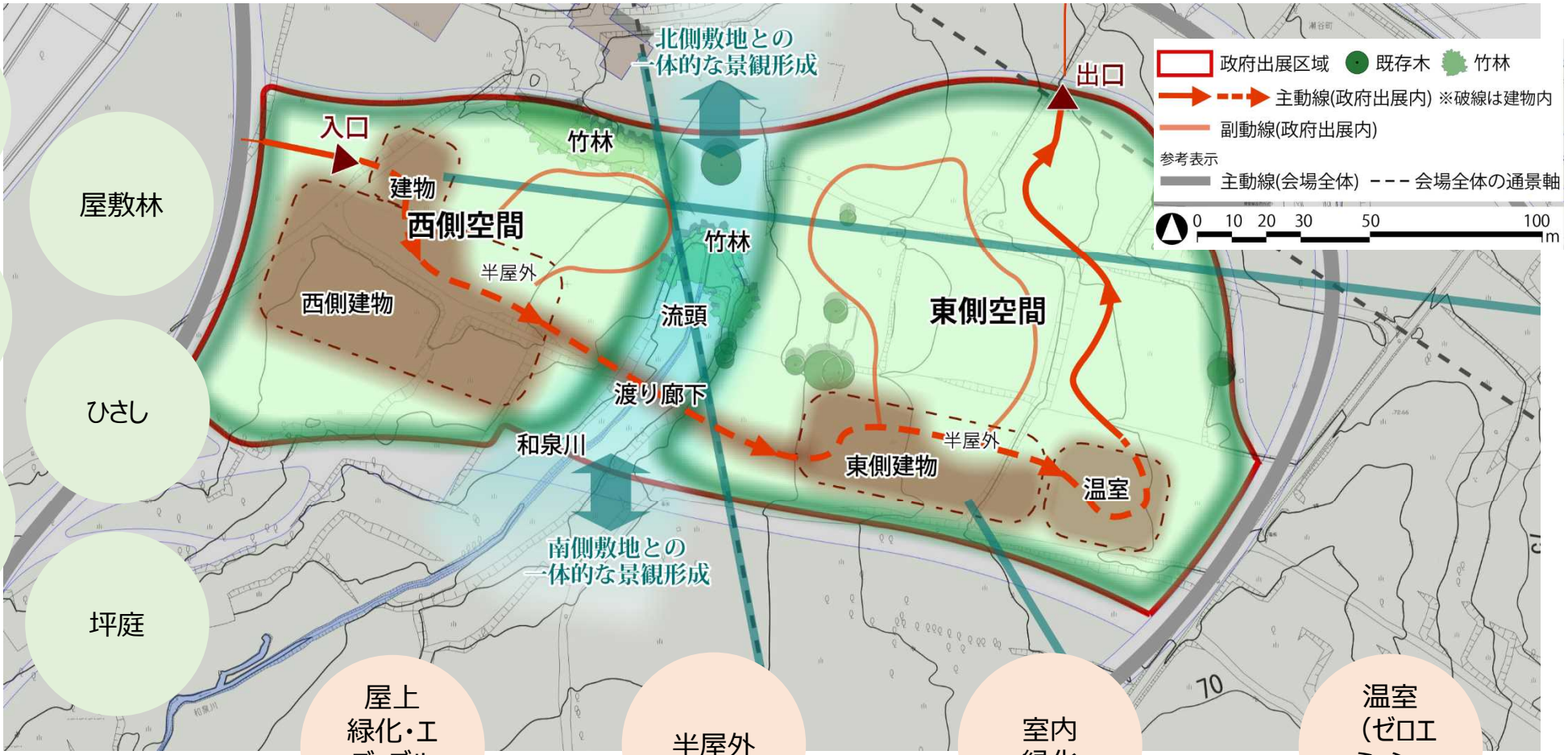
屋敷林

縁側

ひさし

軒

坪庭



屋上緑化・エディブルガーデン

半屋外

室内緑化

温室（ゼロエミッション）

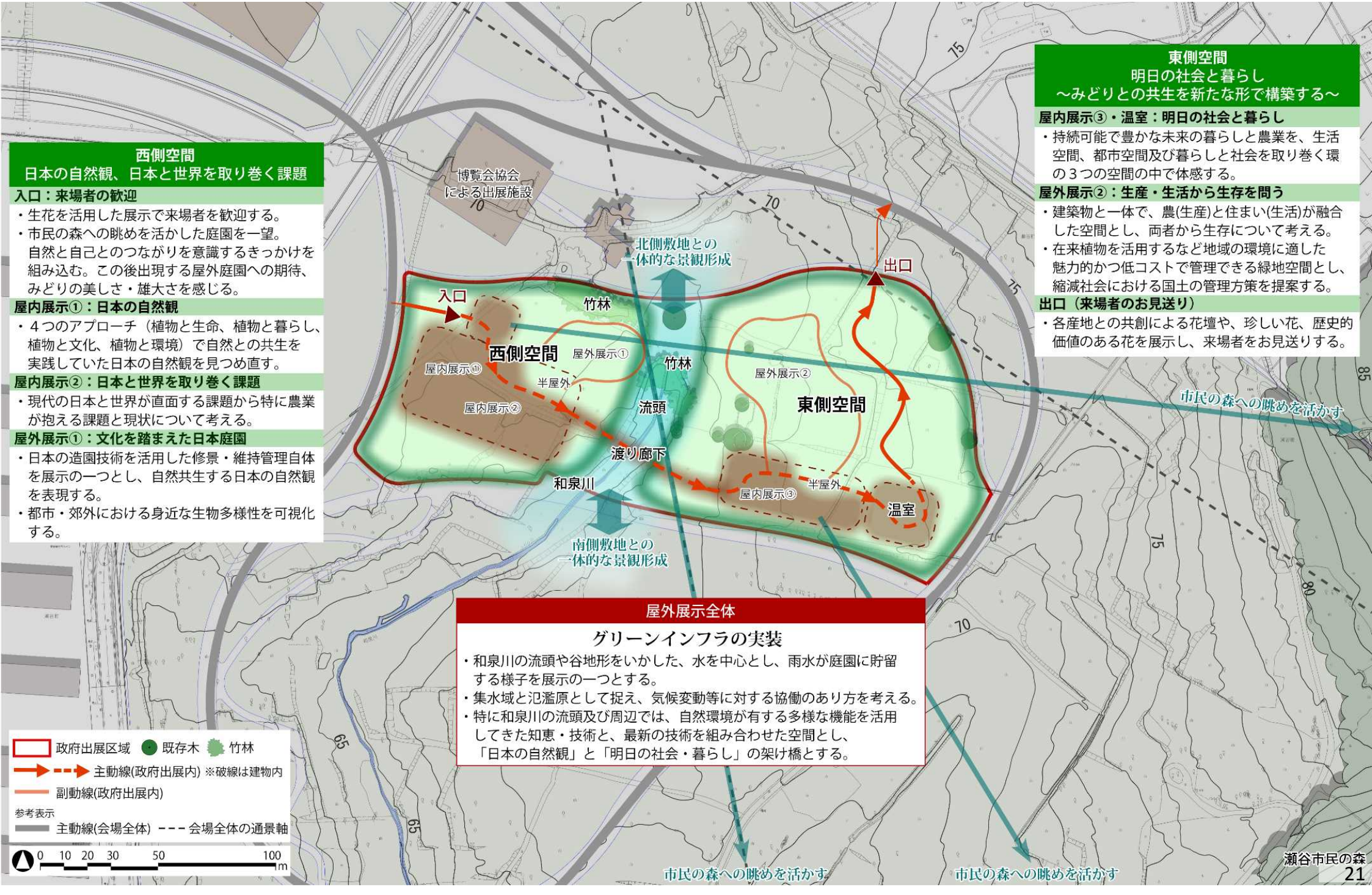
壁面緑化

半屋内

雨水利用

曖昧な屋内外の表現

基本計画図



西側空間
日本の自然観、日本と世界を取り巻く課題

入口：来場者の歓迎

- 生花を活用した展示で来場者を歓迎する。
- 市民の森への眺めを活かした庭園を一望。自然と自己とのつながりを意識するきっかけを組み込む。この後出現する屋外庭園への期待、みどりの美しさ・雄大さを感じる。

屋内展示①：日本の自然観

- ４つのアプローチ（植物と生命、植物と暮らし、植物と文化、植物と環境）で自然との共生を実践していた日本の自然観を見つめ直す。

屋内展示②：日本と世界を取り巻く課題

- 現代の日本と世界が直面する課題から特に農業が抱える課題と現状について考える。

屋外展示①：文化を踏まえた日本庭園

- 日本の造園技術を活用した修景・維持管理自体を展示の一つとし、自然共生する日本の自然観を表現する。
- 都市・郊外における身近な生物多様性を可視化する。

東側空間
明日の社会と暮らし
～みどりとの共生を新たな形で構築する～

屋内展示③・温室：明日の社会と暮らし

- 持続可能で豊かな未来の暮らしと農業を、生活空間、都市空間及び暮らしと社会を取り巻く環の３つの空間の中で体感する。

屋外展示②：生産・生活から生存を問う

- 建築物と一体で、農(生産)と住まい(生活)が融合した空間とし、両者から生存について考える。
- 在来植物を活用するなど地域の環境に適した魅力的かつ低コストで管理できる緑地空間とし、縮減社会における国土の管理方策を提案する。

出口（来場者のお見送り）

- 各産地との共創による花壇や、珍しい花、歴史的価値のある花を展示し、来場者をお見送りする。

屋外展示全体

グリーンインフラの実装

- 和泉川の流頭や谷地形をいかした、水を中心とし、雨水が庭園に貯留する様子を展示の一つとする。
- 集水域と氾濫原として捉え、気候変動等に対する協働のあり方を考える。
- 特に和泉川の流頭及び周辺では、自然環境が有する多様な機能を活用してきた知恵・技術と、最新の技術を組み合わせた空間とし、「日本の自然観」と「明日の社会・暮らし」の架け橋とする。

管理運営計画

➢ 政府出展は博覧会の中核を担う出展のひとつとして、その役割や出展のねらいにふさわしい水準を保持し、来場者が安全かつ快適な環境の中で展示を体験できる、円滑かつ効率的な管理運営計画を検討する。

（１）展示用植物、作物の供給、育成、管理

- 本博覧会の開催国政府の出展として、全期間を通じ常に花と緑を高い水準で良好な状態に維持するため、展示する植物や農作物等に関し、安定かつ効率的な供給・育成・管理ができる計画の検討

（２）展示施設、栽培管理施設

- 会期前から会期中に渡り緻密に育成・管理ができるよう、植栽環境を的確に維持管理できる屋内外の施設の計画
- 大量多品目の植物を円滑に搬入出・仕分け、ストック、育成管理ができる栽培管理施設とストックヤードの検討

（３）順応的な管理運営

- 不確実性の高い自然や生態系を対象とする事業であるため、当初の計画では想定しえない事態にも対応できるよう、モニタリングとフィードバックを行い、継続的な管理運営の検討

（４）季節に応じた管理運営

- 半年の会期の間、それぞれの季節に応じた管理運営の検討

（５）将来への人材育成

- ボランティア活動等を通じ、本出展に携わった方々が、気づきを得て、その後の探求や実践につなげることができるような管理運営の検討

管理運営計画

➢ 政府出展は博覧会の中核を担う出展のひとつとして、その役割や出展のねらいにふさわしい水準を保持し、来場者が安全かつ快適な環境の中で展示を体験できる、円滑かつ効率的な管理運営計画を検討する。

（６）インクルーシブ

- 来場者やスタッフ、すべてのステークホルダーにおいて、多種多様な人々が積極的かつ安心して参加できるよう、インクルーシブを考慮した管理運営の検討

（７）多言語対応

- 世界各国からの来場者に対し、日本の技術、文化等の魅力を充分に伝えられるよう、展示メッセージやサイネージとともに、デジタルデバイスの活用、多言語対応スタッフの配置等により多様な言語ニーズへの対応の検討

（８）環境配慮への対応

- 運営面においてもSDGsの達成に貢献し、その先の社会も見据えた日本の将来像を提示すべく、計画段階から環境負荷の削減に配慮した検討

（９）来場者の安全の確保

- 来場者の安全を最優先とし、感染症対策、暑熱対策等を含めた管理運営計画を検討する。また地震や台風、荒天時等の緊急対応も十分に想定した計画を検討

（10）警備・警護

- 本出展が日本国政府の出展であることに留意し、政府出展としての風格と品位を保持しつつ、展示物の警備や本出展を訪れた賓客の警護等への対応を検討。

行催事計画

- **行催事は「動的な展示」**とも捉えることができ、屋内外における各種展示の効果をより高めるとともに、その更なる理解を促すものとする必要がある。
- **政府出展の理念や博覧会全体の行催事計画を踏まえ**つつ、行催事を通じた**来場者との双方向のコミュニケーション創出**の視点を持つ。また、**行催事の区分を設定**するとともに、以下の要素を組み込んだ行催事計画を検討する。

（１）メッセージ性

- 政府出展の理念を印象的に伝える機会として、暮らしとともにある日本の自然観や明日の社会と暮らしに対する理解を後押しする行催事
- 来場者の心に残り、行動変容を促す行催事

（２）エンターテイメント性

- 感性に訴え、感動や共感へとつなげるとともに、誰にとっても楽しく分かりやすい行催事

（３）参加性

- 多様な主体が参加できる機会として、多様な価値観の交流や新たなつながりを促進する行催事

（４）話題性

- 来場促進やリピート来場にも寄与するよう、多彩で魅力に富み、人に伝えたくなる行催事

（５）季節性

- 日本の気候風土と関連する行事や祭礼
- 植物や作物などによる季節感の醸成
- イベントとしての多客時期や閑散期なども考慮したスケジュールの検討

広報・参加計画

➢ **会期前からの機運醸成・会期中の情報発信・会期後の追体験**という、３つの段階を通じ、各段階に適した情報提供を行い、**多様な主体との共創**を図るとともに、**デジタルを活用した効果的なコミュニケーション**を目指す。

（１）会期前からの機運醸成につながる広報

- 来場者や関係者となり得る全ての人々を対象に本博覧会及び本出展に関する認知・理解を促す。
- 会期前から情報を展開し、機運醸成に寄与する。

（２）未来を担う子供や教育機関との共創

- 子供たちが日本の農や自然に対する学びの場となることを目指す。
- 会期前から地域や教育機関と連携し、関係構築につなげる。

（３）多様な主体の参加による共創

- 関係機関・団体、自治体、市民、企業等の多様な主体との共創を目指し、情報発信や施策を検討

（４）デジタルを活用したコミュニケーション

- リアルでのコミュニケーションに加え、リアルとデジタルを融合させるなど、より効果的なコミュニケーションを目指す。

（５）会期後のコミュニケーション

- 来場者をはじめ、本出展に触れた方が、植物文化を持続的に暮らしに取り入れたくなる相互関係構築につなげる。

今後の進め方

- 令和５年度以降、本博覧会が閉会するまでのスケジュールは以下を想定。
- 政府出展を構成する**屋外展示、建築、屋内展示ごとに検討体制を構築**する。
- 基本計画に基づき各分野が調和した出展とするため、**各分野が連携して検討を進める仕組みの導入**を図る。

※令和５年度の管理運営・行催事、広報・コミュニケーションの検討については、屋内外の展示と同一の体制下で実施することを想定。